日常生活を
構造主義と実存主義で
確変させるには？

２０１９１０ClubJePense

哲学を日常に活かす

と言われても全くピンと来ない人か、
わかったような気になってしまう人がほとんどです

「哲学を日常に活かしてください」
と言われてどう思うか、感じるか

なかなか素直にハイとは言えないのではないだろうか

なぜそうなるのかというと
哲学をひとつの「学問」とか「情報」として捉えているから

哲学は情報ではない

例えば高校で微分積分を習う
コレを日常生活に応用しろと言われてもムリだと思われる
なぜなら、日常生活で微積分が直接的に関係するように見える
状況や場面が思いつかないからだ

哲学も、この微積分と似たような感覚で捉えているケースが多い

しかし
実際は哲学とは
「情報」ではなく「視点」なのだ

哲学は「考えるもの」なのか？

哲学と聞くと、多くの人は
「ものの考え方」
について語られている分野だとイメージする
哲学を学ぶことで「考える力」が養われると

それはそれで間違ってはいないが
耕されていない畑に向かって土を柔らかくしろ
と言っても難しいように
考える力がない状態に考えさせるのは難しい時がある

視点としての哲学

考える＝哲学ではなく
見る＝哲学で捉えてみよう

哲学は実際「視点の変遷」を
語っている分野として解釈してみよう

視点としての哲学

「視点の変遷」を
わかりやすくするために

人の一生に置き換えてみると
「視点の変遷」のニュアンスが伝わりやすい

赤ちゃん→お母さんしか見ていない
幼児期→社会の入り口が視界に入ってくる
青年期→社会の一員として自分がある
壮年期→社会の外側から社会を捉えるようになる
老年期→死を目前にし社会が遠い場所に見えてくる

自分の視点が時間と経験で位置が変わる

「視点の移動」は
理性と感情の割合を変える

世界で起きる諸問題の多くは
感情がかなり多く関係している
（問題の多い国は大体感情的な国民性）

視点が移動すると理性と感情の比率が変化
理性比率が上がれば
問題自体の消滅につながりやすい
だから哲学が役に立つのだ

哲学は「視点の変遷」で観よ

実存主義、構造主義、ポスト構造主義
分析哲学、言語分析、記号論当様々あり
一見非常に難解そうに見えるが

「誰がどこから何を見てるのか」

だけで見るとかなり見え方が変わる

哲学者・思想家たちの
名言を「視点」で見てみよう

「万物の根源は水である」

紀元前500年前後
最古の哲学者タレスの言葉

視点の位置
「自分」が「自分と思っているもの」から
「世界の根源とは何か」を見ている

「無知の知」

紀元前400年前後
ギリシャの哲学者ソクラテスの言葉

視点の位置
「自分」が「自分と思っているもの」から
「自分が無知であること」を見ている

タレスの視点が外側に向いていたことと比較すると
ソクラテスは視点が内側に向いていることがわかる

「イデア論」

ギリシャの哲学者ソクラテスの弟子
プラトンが提唱したもの

視点の位置
「自分」が「自分と思っているもの」から
「存在するもの」と「存在すると認識していること」
を見ている（いわゆるRとR'の走り）

「世界」と「世界と呼ばれているもの」を
同一化していない、人間の不足を直視

「地動説」

15世紀ポーランドの天文学者
コペルニクス提唱

視点の位置
「みんな」が「地球は絶対不動と思っている」
ところを「動いているのは地球」とした

それまでの「世界」が絶対視していたものを
覆す、いわばアンチテーゼの代表格

「死に至る病とは
絶望のことである」

実存主義の祖、キルケゴールのキメゼリフ

視点の位置
「自分」が「自分にとってどうか」
ばかりを見ている

世界だなんだ言っても結局自分じゃん的な
中世欧州の中二病

「ルサンチマン」

実存主義のドン、ニーチェが生んだ
現代まで受け継がれるある種の最高傑作

視点の位置
「自分」が「社会的弱者とその負の感情」
を自分から切り離して見ている

自分に溺れるのではなく自分を超える視点を模索

「死とエロス」

実存主義の異端者、ジョルジュ・バタイユ
ニーチェ同様現代人を掴んで離さないテーマ

視点の位置
「自分」が「人類が目をそらしている、
しかし逃れられない絶対的本能」
を自分から切り離して見ようとしていた

いわば「禁忌」に学術的に踏み込んだ勇者

「シニフィアンとシニフィエ」

構造主義、近代言語学の父
フェルナンド・ソシュール提唱

視点の位置
「言語学」の視点が「言葉というものの構造」
を分析、解説した結果のひとつ

視点としてのポイント
「自分」と「言葉」は別の位置にある

「権力・監獄の誕生」

パノプティコンでおなじみ
ミッシェル・フーコーの研究分野

視点の位置
「研究家」の視点が「権力というものの性質」
を見つめていたもの

実存主義は権力の傘下に視点があるが
これは視点が権力を外から見ている

「語りえぬものは沈黙しなければならない」

分析哲学と言えばウィトゲンシュタイン

視点の位置

「言語」の視点が「言葉というものの意味」を分析、解説した結果のひとつ

自分や世界を形成する「言葉」に視点がある

自分や世界は言うなれば言葉の奴隷

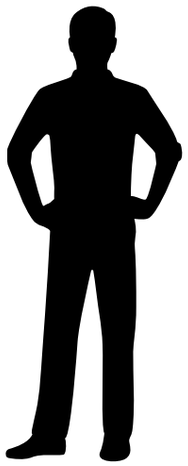
「不完全性定理」

天才数学者クルト・ゲーデルの発見

視点の位置
「数学者として」の視点が「論理」
を突き詰めた結果、神の証明になってしまった

数学・論理学の観点で（つまり理性）
真理を追究したら
逆に真理なんてないよウワアアとなったもの

これらの「視点」を
図解すると
こんな感じになります

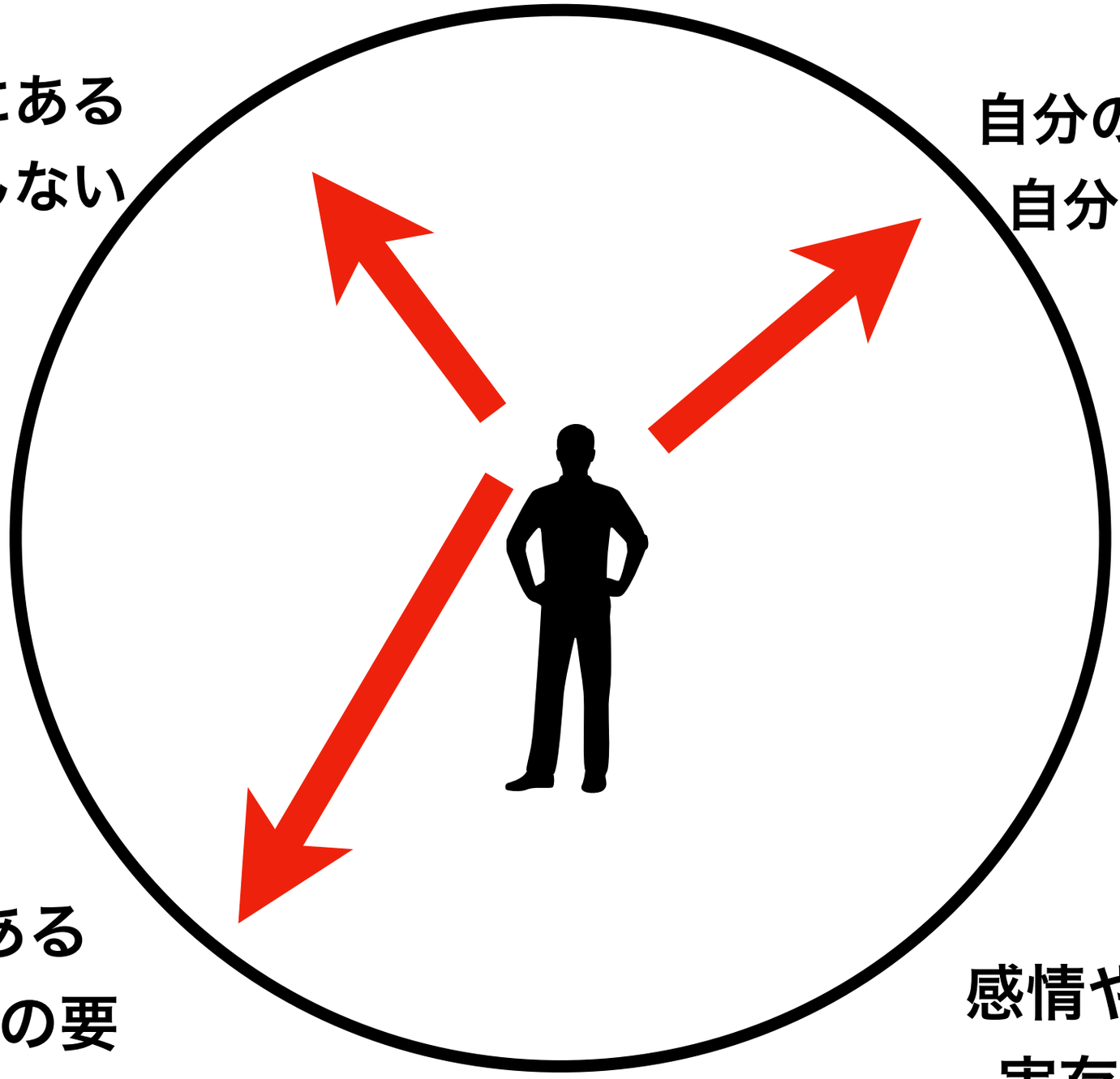


← この人が語り手。視点の起点

実存主義までは大体コレ

自分は世界の中にある
世界の外は存在しない

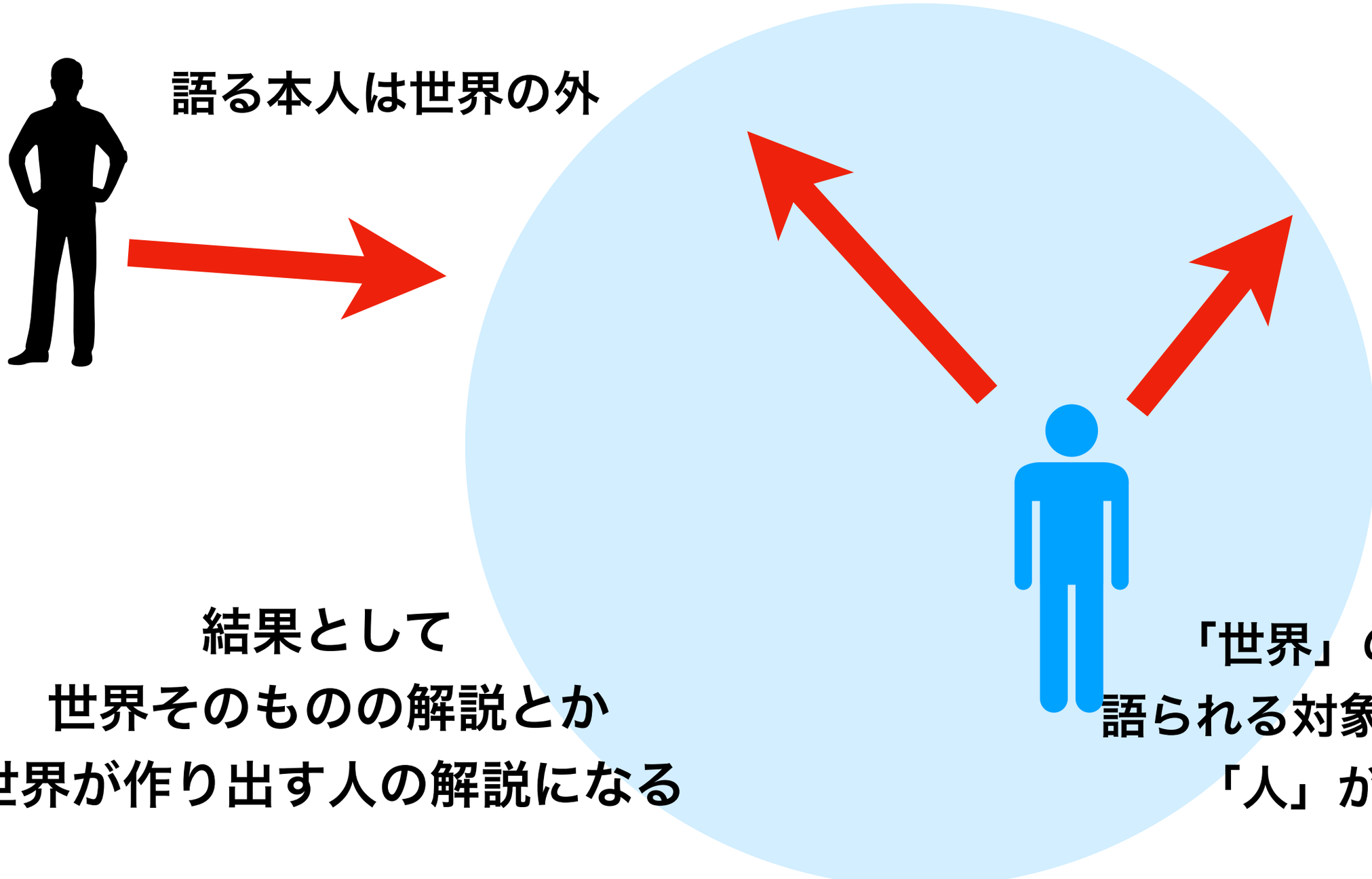
自分の外にある世界を
自分がどう捉えるか



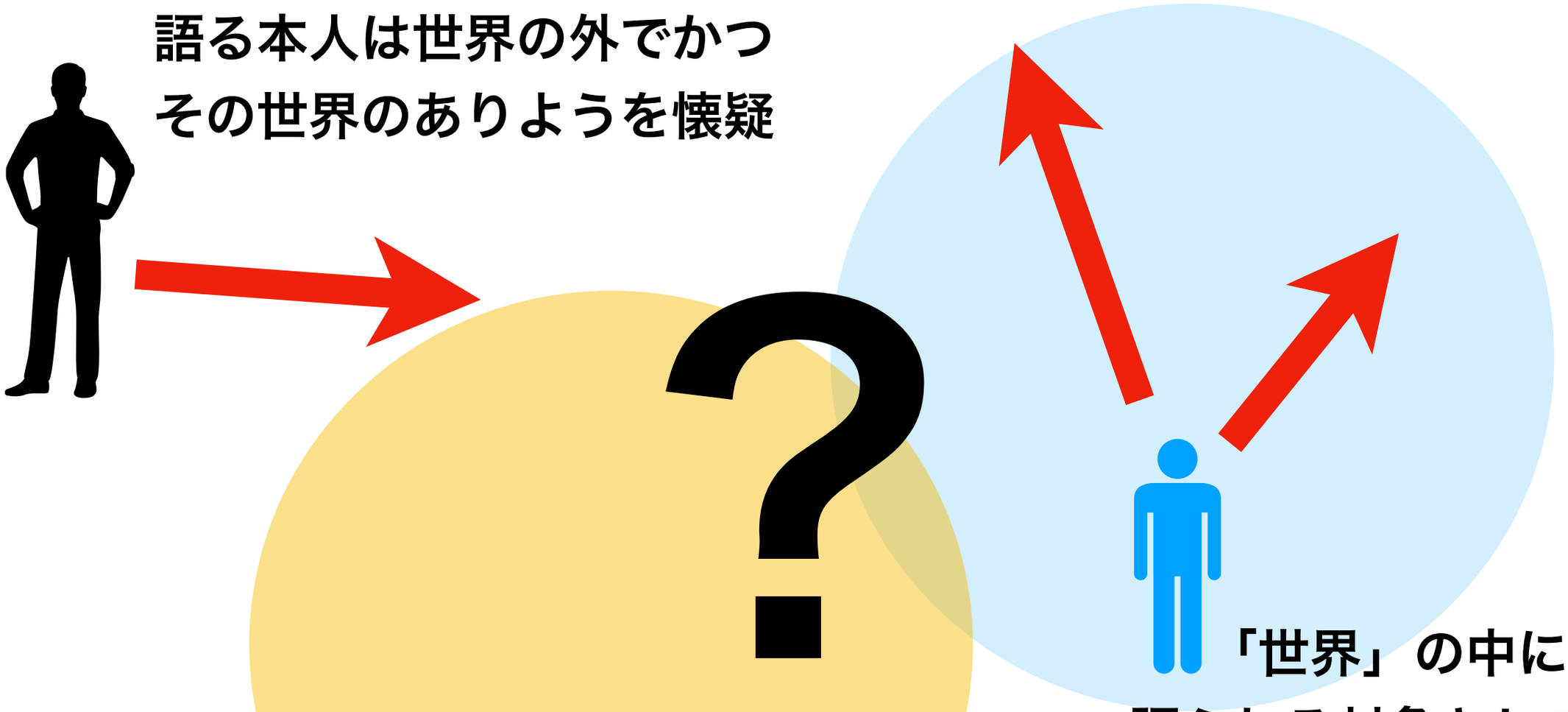
結果として
視点の起点である
「自分」が理論の要

やたら
感情や欲望絡みがち
実存主義あるある

構造主義は大体コレ

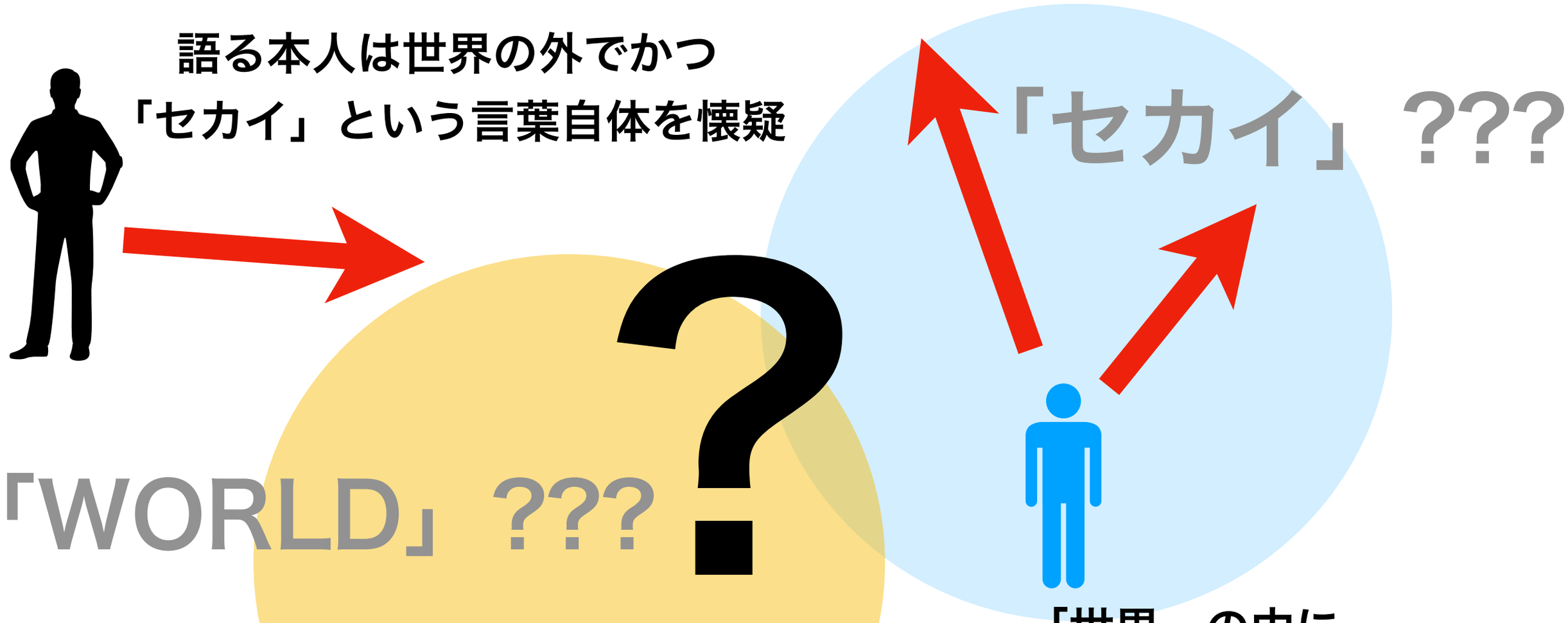

語る本人は世界の外
結果として
世界そのものの解説とか
世界が作り出す人の解説になる
「世界」の中に
語られる対象としての
「人」がいる

ポスト構造主義は大体コレ



結果として
世界と呼ばれるものの不確実性
不確実性の多い人というものの話になる

分析哲学は大体コレ



結果として
世界を世界と呼ぶに至った
言葉ってなんだ？に終始

「世界」の中に
語られる対象としての
「人」がいる
が、その「ヒト」って言葉は何？

これをどう日常に活かすか？

このように、哲学は常に視点の起点とターゲットが
論点の中心にあったとも言え、
それによって「世界」の在り方自体が変化、進化した

「世界」＝自身と置き換えるとつまり

視点の位置を自己認識することが
日常や人生を変えるヒントになる

焼肉を食べたとする

「やべえおいしい！！」⇒自分の味覚が肉に向いている
「これは黒毛和牛だ！！」⇒牛種によって価値が変わる
「てか別に牛角でもいい」⇒構造システム自体を俯瞰
「なぜ人は牛肉に惹かれるのか」⇒本能、欲望
「ギュウニクという言葉が意味するもの」⇒ウィト？

視点が変わるとものの見方や思考が変わる

嫁とケンカ

「こいつムカつく！」⇒
自分の視点が嫁の態度にだけ向いている
「普通嫁なら家事するだろ」⇒
社会構造からの視点
「てか嫁が家事担当って誰が決めた？」⇒
社会構造自体を懐疑、脱構築
「家事と嫁って連動してるね」⇒記号論に近い
「カジとはその使用である」⇒ウィト？

視点が変わるとケンカの仕方が変わる
場合によってはケンカの存在が消える

子供が不登校

「イライラする」⇒
自分の視点が子供の態度に向いている
「学校に問題あり？？」⇒
学校や教育構造からの視点
「学校ってそもそも行く必要ある場所？」⇒
構造自体を懐疑、脱構築
「登校することが正しいの根拠は？」⇒デリダ登場
「学校という場に精神が監視されてるね？」⇒フーコー登場

視点が変わると不登校の意味が変わる

思考したら視点を見ろ

日常において自分が反射的に思ったこと
感じたこと、考えたことを
「どの視点がどこに向かって思った？？？」
とまずは捉えてみること

その多くは実存的な感覚になっているはずだが
思考が洗練されてくると必ず構造寄りになる
更に洗練されてくると脱構築になってくる
脱構築くらいになると精神に対する理性の割合が
かなり多くなるため、日常から問題が大幅に減る

感情は実存視点が大きい
構造よりの視点を身に着けて
問題の外に行き
理性を謳歌しよう